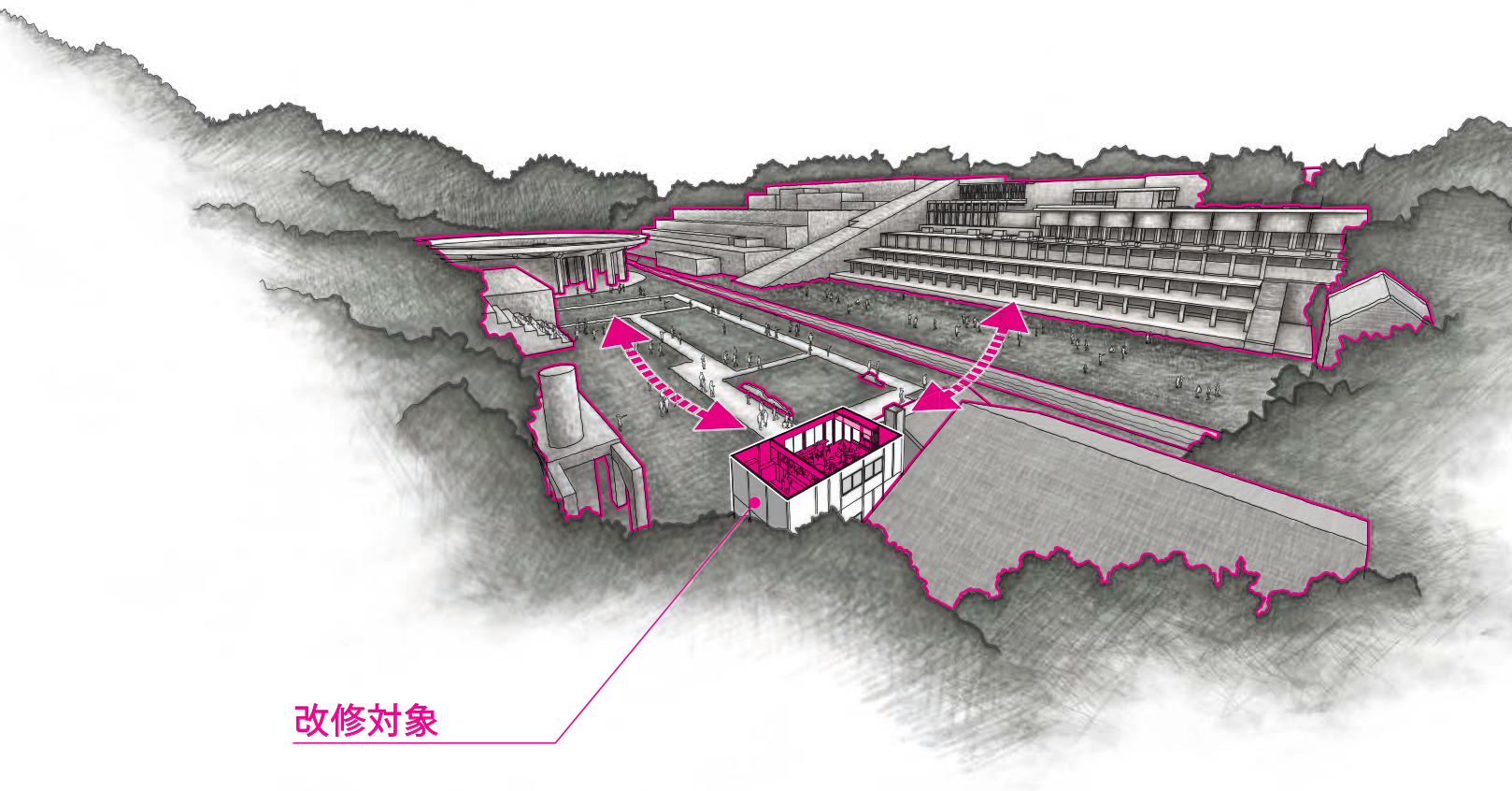


産業遺産を望むカフェ

手軽に加工出来る柔らかさ、一人でも移動しやすい軽さやスケール、表面の質感など、木材の特徴が、産業遺産エリア内という特異な条件のカフェの内装に上手くフィットした計画となった。



■ 現場に残された柱梁棚板を再利用

場に適した荒い材の確保、SDGs、経費削減などのメリットがあった。
加工、転用が手軽に行うとが出来る木材の利点を生かした計画となった。



■ 構成について

転用材の鱗壁

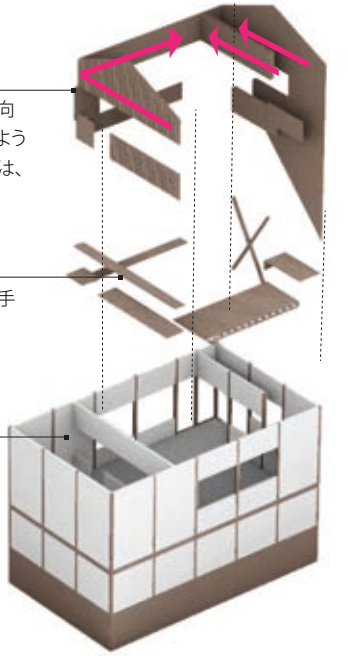
板の重ね方の方向を窓側・遺産側に流れが向くように配置。施設に入るときは引っかかるように質感が荒々しく感じられ、景色を望むときは、逆に落ち着いた背景となる。

機能の追加

筋交い、テーブル、小上りなどの機能は直接手を触れる箇所なので、新規材で綺麗に追加。

2階の間取り変更

元々は階段室と倉庫の2つに分かれていたところを、キッチンと客室(カフェ)の2つに分ける間取りに変更。



■ 再利用木材の内装仕上げについて

産業遺産として70年以上風雨にさらされ風化してきた遺産の表面は、自然物のような凹凸のある荒々しい質感となっている。
カフェ内部も鱗上に再利用材を凹凸が強く出る貼り方をする事で、産業遺産の延長のような空気を纏う内装となった。

再利用した木材は釘の跡や、解体時に付いた傷などでより一層荒い場に適した材となった。

色についても、このエリアでよく使われる暗めの彩度の低い土や錆色のような茶色で塗装されていたため、そのままの色で転用することができた。



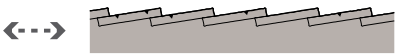
産業遺産の現役時



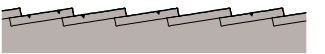
70年



産業遺産の現在



延長



再利用木材を重ねた鱗壁

